

白鷗大学論集 第13巻 第2号 (1999) 19～25

大学院への招待

一意専心

山田 徳彦

Concentration on One Purpose

Norihiko Yamada

私は、平成3年3月、白鷗大学経営学部卒業後、早稲田大学大学院商学研究科修士課程に進学し、平成9年3月に同研究科博士課程の単位を取得した。その後平成10年4月より、母校白鷗大学の教壇に立たせていただいている。すでに1年が過ぎようとしているが、やはり在学中からご指導をいただいた諸先生方や、事務局の方の前では依然として「緊張」の日々である。

今回「大学院への招待」というテーマで大学院を志す方を対象とした一文を書く機会をいただいたが、私の専攻は、「交通経済」という経営学部ではちょっと変わった分野なので、経営学を志す方の勉強に役立つようなことを的確にアドバイスすることは困難である。それゆえ、大学院を志す君たちの「先輩として」、心の持ち方について述べさせていただきたい。

<いくつかの「言葉」>

白鷗大学卒業を前に、何人かの先生から、その後の院生生活、ひいては研究者としての方向性を決定づける言葉をいただいた。もちろん、その言葉を完璧に覚えているわけではないが、はじめにそのニュアンスと自分の感じ方

について紹介したい。

- ① 「服装にせよ、指導教授に対する態度・言葉遣いにせよ、大学院は学部時代とは違うものだ」と認識した方がよい。基本的には大人であるからだ。もしかしたら周囲の院生は、ある種の『余裕』を見せているかもしれないが、それに合わせず、一生懸命勉強しなさい。」

この言葉については、学部時代とは異なって、あるいは学部以上に、謙虚にご指導をいただくという気持ちを常に持ち続けなければいけない、また、「周りがあまり勉強してなさそうだから」ということと自分の行動は関係なく、自分のペースで勉強しなければいけない、と理解した。

- ② 「少なくとも修士課程の2年間はアルバイトをせずに、勉強・研究に専念しなさい」

この言葉により、大学院は「モラトリウム」でもなければ、優雅な生活を送るためのものでもなく、その後の（研究者としての）「土台」を構築する「貴重な時間」であることが強く認識された。

- ③ ある先生に「根性見せれば大学院生活は何とかなりますよね」とお伺いしたところ、「いや、結果を出さなきゃだめだよ。」と答えられた。

この「結果を出さなきゃだめだ」という言葉は、きわめて重い言葉であった。もちろん、「結果がすべてだ」とは思わないが、自分以外の人々は普通ある人の「結果」を見てその人を判断・評価する。それゆえ、どんなもっともらしい言い訳をしても、一度出てしまった結果の前では、言い訳は何の意味も持たない。ただ、誰でもはじめから、優れた「結果」を出せるわけではなく、普通の人であれば、何らかの結果を出すために相当な努力が必要であろう。先の先生には「結果ださなきゃだめだよ」と言われたわけであるが、この言葉をもう少し広く捉えて、「出てしまった結果にあきらめがつくだけの根性をみせる」がその後のポリシーとなった。

<なぜ大学院で交通経済か？>

このような先生方の言葉を胸に、大学院生活がはじまったわけであるが、ここで「なぜ大学院に行こうとしたのか」について振り返っておきたい。今日、晴れて教員となり（研究者の端くれとなり）、母校の教壇に立っているわけであるが、今から思うと「このような今日の姿」を想定して大学院進学を志したかどうかは疑問である。心の奥底どこかに「研究者になりたい」という気持ちがあったことは間違いないが、それは遠い将来を念頭に置いたもので、直接の動機は白鷗大学在学中に「とにかく無我夢中に何かをやりたい。その対象は学生だから勉強・研究だ。」「どうせだったら、大学院に進んで死ぬほど勉強しよう。」というかなり単純な考えをもったことである。

当時は今ほど「大学院に進学する」というのは一般的なことではなかったし、また大学院がどういうところか、というイメージもなかった。周囲の人が見る目も、私の選択は危険な「ギャンブル」であったし、私自身もそう認識していた。にもかかわらず進学しようとしたのは、当時の時代背景のせいかもしれない。ちょうど私が卒業する頃は、バブル経済の真っ盛りで、就職も現在に比べればずっと楽であったし、世の中全体が浮かっていたような気がする。それゆえ、私自身も明確な将来像やビジョンといったものを持たず、とりあえず、チャレンジしてみる、という気持ちが強かった（のではないかなと思われる）。

それでは、なぜ「交通経済」という一風変わった分野に進んだかといえば、これまた偶然の選択の結果としか言いようがない。白鷗大学に在学中、「公企業論・公益企業論」というゼミに所属していたが、その指導教授にある日「交通経済という分野も、ゼミで扱っている内容に近いよ」と教えられた。その言葉に興味を持って、「ブックス中島」で本を探したところ、一冊だけ有斐閣の『交通の経済学』という本を見つけた。この本の中で特に「交通投資」について書かれた箇所強く感動し、「いつかはこのようなエレガントな研究をしてみたい」と強く思ったことが交通経済を専攻するきっかけであ

る。このとき、もし他の「交通経済」の本を見ていたら、この分野を専攻しなかったかもしれない（ちなみに、大学院ではこの箇所を執筆された先生にご指導をいただいたわけであるが、エレガントな研究への道の「遠さ」を痛いほど認識し、現在も、これからも「遠さ」を感じ続けるであろう）。

<修士課程と「恐怖感」>

大学院進学は、自分にとって確かにギャンブルであった。特に進学した当初は、周囲の友人（特に白鷗大学で同じゼミだった友人）が、「着々と仕事のできる人」になっていく中で、将来どうなるかわからない不安、日々どのように時間を使っていくか、またその使い方が良いのかどうかの不安におそわれた。大学院での講義・ゼミはもちろん、厳しかった。指導教授の求める水準に少しでも応えようとする、あるいは現在十分な能力はないが、一生懸命やっています、ということが目に見えるような形にするのは、大変であった。

語学、特に第二外国語（フランス語）は、はじめの2ヶ月は地獄であった。講義は、一文ずつ仏文を読んで訳して行くわけであるが、周囲の院生との「実力の差」は果てしなく大きく、みんながずらずらと読んで次々と訳していく中、私は一語一語につかえながら読み、一人で講義の時間の大部分をつかってしまった。担当の先生は、何回目かの講義の時間私に言った「山田君、日本語に訳してこなくて良いから、フランス語を読む練習だけしてきなさい。」「朝7時45分から必ず、NHKのフランス語講座を聴きなさい」と。私はこの先生の言葉を守り、意味がわからなくてもとにかく読むことができるようにし、朝は必ずラジオの前に座った。必死の努力が徐々に実を結び、しばらくすると、それなりにフランス語らしく文章を読み、それなりに訳せるようになった。それは、ひとえに、少しでも成果があがれば（たとえ、低レベルであっても）それを認めてくださった先生のご指導のおかげである。もっとも、院生時代のはじめの3年間はさらにフランス語で四苦八苦するの

であるが。

ゼミの指導教授は、研究者としてはもちろん、「男」として、尊敬を通り越して「崇拜」の対象であった。研究者としてはきわめて優れた方であり、分野がら、高度な理論体系と複雑な現実の両方を頭の中に併せ持っているのであるが、それに加えて（「武道」を極めたこともあって）曲がったことが嫌いで、研究にせよ教育にせよ、恐ろしいほど真摯に臨む方でもある。特に最初の頃は迂闊に近寄るとバッサリ切られそうな雰囲気があった。院生時代から今日に至るまで、私が行ったゼミ・講義での発表や、日々勉強している水準は、氏からすればおそらく低レベルであった／あるに違いないが、にもかかわらず、私の努力と根性を買ってくれ、少しでも良い面を見つけて褒めてくださった。ただし、褒めていただけるのは非常にうれしく、励みになる反面、次はそれ以上の成果をあげないと評価に値しないわけで、それゆえ、喜びとともにある種の「恐怖感」にさいなまれた。

今でも、かなりこの意識が強いのであるが、自分をご指導いただく方、あるいは共同で何かをする人から、「何とかして見放されないようにする」「一度見放されたら、二度と見直してくれない」という恐怖感が大学院時代を通じて、強く身についてしまった（この恐怖感が勉強・研究をする原動力であったかもしれない）。これは、先に紹介した白鷗大学在学中の先生方のアドバイスが根底にあったからであろう。

<今から振り返って>

このように大学院進学後、語学や専門分野を研究するための根底にある分野の蓄積（「交通経済」というと「鉄道マニア」をイメージする人が多いようであるが、実際の内容は経済学的に交通について考えるという「応用経済学」であり、それゆえ、ある程度までは「経済学」、特に「ミクロ経済学」の理解が欠かせない）のなさを痛感し、「この先いったいどうなるんだろう？」という不安に捕らわれた日々を過ごした。それでも何とか修士論文を提出し、

一年間の研修生（分かりやすく言えば「浪人」）生活を経て、博士課程に進み、終える（単位を取得する）ことができたのは、前述の「恐怖感」と研究を進める上で必要不可欠であるが、現時点では「自分にできないこと・足りないこと」を見だし、「どうしたらできるか」を考えるという行動（これは白鷗大学の経営戦略論の講義でたたきこまれた、いわゆる Strategic Mind に根ざしていると自分では考えているが）をとっていたからだと思う。

ただし、それ以上に「環境に恵まれた」面が重要であったかもしれない。何よりも指導教授が「崇拜」の対象となるほどの人であったことが最大の要因であるが、その他にも同じゼミに属したかなり年長の同期生はどんなことでも相談に乗ってくださったし（個人的にフランス語を指導していただいたりもした）、白鷗大学在学中のゼミの指導教授はその後他大学に移られたが、何かと気にかけていただいた。また、親兄弟も私の行動を理解し応援してくれた。こういった私をとりまく「環境」がきわめて良好で、十分に勉強・研究に専念できたことは、今から思うと最も重要なことであったかもしれない。

<一意専心>

さて、大学院に進学しようとする動機は人によって様々であろう。研究者になりたいという人もいれば、死ぬほど勉強・研究したい、あるいは資格取得のためや、中にはモラトリアム程度に考えて大学院に進む人もいるかもしれない。大学院を志す動機の是非について、ここで言及するつもりはない。ただ、どんな動機・目的であれ、大学院というのは学問をする場であり、学習・研究を通じて成果を出す場である。修士課程の2年間というのはそんなに長い時間ではない。ダラダラ過ごせばあっという間に過ぎ去ってしまうくらいの時間である。その時間が過ぎ去ったとき、十分な結果が出ていなければ、周囲の人は「ムダに時間を過ごした」としか見てくれないし、また、どんな言い訳も自分自身を誤魔化すものでしかないのではないか。

それゆえ、大学院を志す諸君には「一意専心」を旨として、勉強・研究に

取り組んでいただきたい。大学院は、その後の人生を切り拓く「準備期間」であり、「チャンス」でもある。このことをよく認識して、真に有効な日々を送っていただきたい。どれくらいの時間を要するかはわからないが、「結果は後からついてくる」ものである。最後に、私の経験を通じて言えることは「とにかく根性を見せて（しゃかりきになって）がんばっているうちは、周囲の目は暖かい」ことである。

（本学経営学部専任講師）